

令和2年度第2回  
広島県総合教育会議会議録

令和2年8月25日

令和2年度第2回 広島県総合教育会議会議録

令和2年8月25日（火） 13：00開会

15：00閉会

1 出席者の職及び氏名

知事	湯崎	英彦
教育長	平川	理恵
教育委員会委員	細川	喜一郎
教育委員会委員	中村	一朗
教育委員会委員	志々田	まなみ
教育委員会委員	近藤	いずみ
教育委員会委員	菅田	雅夫

(外部有識者)

慶應義塾大学環境情報学部教授	安宅	和人
慶應義塾大学環境情報学部教授	今井	むつみ
東京大学先端科学技術研究センター教授	中邑	賢龍

2 協議事項

- (1) 次期「広島県 教育に関する大綱」(素案)について
- (2) その他

経営企画監： ただ今から、令和2年度第2回広島県総合教育会議を開会いたします。

初めに、湯崎知事より御挨拶を申し上げます。

湯崎知事： 令和2年度の第2回広島県総合教育会議開催に当たりまして、一言、御挨拶を申し上げます。

皆様方におかれましては、本当にお忙しい中、御出席を賜りまして誠にありがとうございます。

また、本日は3名の学識経験者の皆様方に、ウェブ会議によって御出席をいただいております。誠にありがとうございます。学識経験者の皆様方におかれましても、公私とも大変御多用のところ御出席を賜りまして、改めて御礼を申し上げたいと思います。

さて、6月に開催をいたしました第1回の総合教育会議におきましては、次期大綱の策定に向けました基本的な考え方や大綱に盛り込むべき項目などにつきまして協議をさせていただきまして、非常に活発で有意義な議論ができたのではないかと考えております。本日は、第1回の会議でいただいた御意見も踏まえまして、事務局内で検討を重ねてまいりました大綱素案につきまして、学識経験者の皆様方から御意見を頂戴するとともに、学識経験者の皆様方にも御参加いただきまして、議論を進めさせていただきたいと考えております。

今後5年間の本県教育の方向性を示す「教育に関する大綱」は、「広島で学んでよかったと思える日本一の教育の実現」を目指す本県にとりまして非常に重要なものでございます。私といたしましても十分に議論を尽くした上で策定をしたいと考えているところでございます。

御出席の皆様方におかれましては、自由闊達な御議論を賜りまして、本日の総合教育会議が有意義なものとなりますようお願い申し上げます。挨拶に代えさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

経営企画監： ここで、本日御出席いただいております、学識経験者の先生方を五十音順で御紹介させていただきます。

まず、慶應義塾大学環境情報学部教授、安宅和人様でございます。

続きまして、同じく慶應義塾大学環境情報学部教授、今井むつみ様でございます。

東京大学先端科学技術研究センター教授、中邑賢龍様でございます。

どうぞよろしく願いいたします。

続きまして、本日の日程について御説明申し上げます。

お配りしております次第でございますように、本日はこの後、次期「広島県 教育に関する大綱」の素案について、御協議いただきます。協議に当たりましては、まず、学識経験者の皆様からそれぞれ御意見を頂戴し、その後、先生方にも御参加いただいた上で、大綱素案について御協議いただきたいと思います。

それでは、協議に入ります。

これより湯崎知事に進行をお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

湯崎知事： それでは、早速でございますけれども、協議を進めたいと思います。

先ほど申し上げましたとおり、本日の議題は次期「広島県 教育に関する大綱」の素案でございます。

初めに、大綱素案につきまして、事務局から説明をお願いします。

経営企画監： 改めて失礼いたします。広島県教育委員会経営企画監 沖本でございます。

それでは、次期「広島県 教育に関する大綱」の素案について、御説明をさせていただきます。これより、着座にて失礼いたします。

次期「広島県 教育に関する大綱」の策定に当たりましては、去る6月8日に開催いたしました第1回の総合教育会議におきまして、大綱策定の基本的な考え方や大綱に盛り込む項目案、そして、項目案を踏まえた柱立てのイメージについて御協議をいただいたところでございます。その際に皆様からいただいた御意見につきましては、お手元の参考資料1に概要として取りまとめているので、御参考にしていただければと思います。

それでは、資料1を御覧ください。まず、次期教育大綱の構成イメージについて御説明申し上げます。

全体構成についてでございますが、大きく総論と各論の二つのパートに分かれております。総論パートにつきましては、資料上段の青字四角囲みでお示しをしておりますが、策定の趣旨や大綱の位置づけなど、7項目に分けて記載をしております。中でも「本県教育の現状・経緯」や「教育を取り巻く社会情勢の変化等」につきましては、第

1 回会議において、現大綱を策定してからの 5 年間の振り返りや 5G, I o T 等をはじめとするデジタルイゼーション, これに続く DX といった社会情勢の変化を受け、次期大綱の取り組むべき方向を整理すべきといった御意見を踏まえまして、新たに総論の中で項目立てを行ったものでございます。以上が総論の構成の概略でございます。

次に、黄色部分になりますが、各論パートでございます。こちらは、大きく就学前教育を含め、学校教育、学校教育等を支える環境、そして生涯学習を支える環境の三つで構成し、乳幼児期における質の高い教育・保育の推進をはじめとする八つの柱と、これに連なる右側の 23 の小柱で構成をしてございます。この中で、最下段の「生涯学習を支える環境」につきましては、第 1 回の会議でお示しをしたイメージでは、柱の 6, 7 と一くくりで学校教育等を支える環境としておりましたけれども、生涯学習は大人のための教育も含んでいるということで、柱 6, 7 と一くくりにせず分けるべきという御意見を踏まえ、枠組みを変更し、独立した形にいたしました。以上が各論の構成の概略でございます。

続きまして、資料の 2 を御覧ください。素案の記載内容について御説明申し上げます。

次期大綱素案を作成する中で、ポイントとなる部分について下線を引いてございますので、この箇所を中心に概要を御説明いたします。

1 ページを御覧ください。まず総論でございます。1 で策定の趣旨、2 で大綱の法的位置づけ、そして、3 で大綱の計画期間を記載してございます。

計画期間は令和 3 年度から令和 7 年度までの 5 年間とさせていただきます。この間の本県教育の取組の方向を次期大綱でお示しするという事としてございます。

次に、「4 本県教育の現状・経緯」でございますが、こちらでは、特に現大綱策定後の 5 年間での取組などについて、乳幼児期、初等中等教育段階、高等教育段階のステージごとに取組の現状等を記載してございます。

続いて、2 ページをお開きください。「5 教育を取り巻く社会情勢の変化等」でございます。

こちらでは、大綱策定後の 5 年間に加え、今後予想される社会情勢の変化のうち、特に教育に関連すると思われるトピックについて記載してございます。トピックとして取り上げてございますのは、括弧書きの表題にございますとおり、「少子化・高齢化」や「グローバル化の一層の進展」、「急速に進展するデジタル技術への対応」、「子供の多様性への対応」、3 ページに移りますけれども、「全国的に進む主体的な学び」、「人生 100 年時代の到来」、最後に「新型コロナウイルス感染症により引き起こされた社会経済環境への対応」の計七つでございます。特に、第 1 回の会議で新型コロナに対応した教育の展開についての御意見を多く頂戴したことから、学校教育における新型コロナウイルス感染症は、新興感染症等に対する恒常的なリスクへの備えの重要性を明らかにしたなどの記載をさせていただいております。

続いて、「6 本県教育の基本理念・目指す姿」を御覧ください。四角囲みのおおり、第 1 回の会議でも協議をいただきましたが、現大綱の基本理念や目指す姿を継承していきたいというふうに考えてございます。

4 ページをお開きください。「求められる人材像」でございます。

目指す姿を少し書き下したものと捉えていただければというふうに思います。ここでは、本県教育の現状や社会情勢の変化を踏まえ、一つ目の丸の 3 段落目の下線部分でございますが、「このような変化の激しい社会においては、様々な知識や情報を組み合わせる新たな価値を創造する力や多様な他者と協働・協調できる力、さらには、進歩し続けるデジタル技術に適応し、活用できる日本最高レベルのデジタルリテラシーなど、持続可能な社会の創り手として、予測困難な未来社会を自立的に生きていくために必要な資質・能力を有する人材が求められる」といったように、第 1 回の会議でも多くの意見を頂戴しました、急速に進むデジタル化の進展を踏まえた記載とさせていただいたところでございます。

また、二つ目の丸でございますけれども、人生 100 年時代を念頭に、必要な資質・能力等を社会のニーズに応じてアップデートしていく必要があるという視点で、新たに記載したものでございます。

続きまして、5 ページを御覧ください。「7 取組の方向」でございます。

これまで説明をいたしました本県教育の現状や社会情勢の変化、本県教育の基本理念・目指す姿を踏まえまして、本県教育が今後 5 年間で取り組んでいくべき方向について、その概略を記載してございます。本県教育の大きな方向性としては、「学びの変革」

を中心に、乳幼児期から大学・社会人まで一貫した学びを実現していくことが肝になると認識をしております。

このため、5ページの四角囲いに、このコンセプトを念頭に各発達段階に応じた中心となる取組の方向について記載しているところでございます。とりわけ四角囲みの二つ目の黒ポチの初等中等教育段階につきましても、前回の会議で「個別最適な学びの推進」や「教育のデジタル化」、「教員の指導力・専門性の向上」といったところに注力していくべきという御意見を多くいただき、その御意見を反映させていただいたところでございます。

続きまして、6ページを御覧ください。各論について御説明申し上げます。

各論におきましては、それぞれの柱ごとに、本県の認識や現大綱策定後の5年間の振り返り、そして、これらを踏まえた今後5年間を見据えた取組の方向性などを記載しているところでございます。

まず、「1 乳幼児期における質の高い教育・保育の推進」についてでございますが、乳幼児期における教育・保育についての基本認識などについて記載をした上で、園・所等における教育・保育の内容の充実や家庭教育支援、さらには幼保小連携の充実に取り組んでいくことなどについて記載をしております。

次に、「2 主体的な学びを促す教育活動の推進による、これからの社会で活躍するために必要な資質・能力の育成」についてでございます。

こちらでは、小柱の「基礎・基本の徹底」において、知・徳・体に共通する要素として、これからの社会に必要な資質・能力をバランスよく育成していくことが重要であること、今後も、児童生徒一人一人の学びの土台となる基礎・基本を確実に身に付けさせていくこと、7ページに移りますけれども、小柱「初等中等教育段階における『主体的な学び』を促す教育活動」におきまして、全国に先駆けて実践する「学びの変革」について、社会情勢の変化を踏まえ、更に加速していくことが必要であること、「学びの変革」を加速させていく上で、デジタル技術の進展・高度化を踏まえ、「主体的な学び」を充実させることが重要であること、さらには、こうした学びの実現に向け、課題発見・解決学習や異文化間協働活動について、小学校から高校まで系統的に推進することなどについて記載をしております。

次に、「3 一人一人の多様な個性や能力をさらに生かし、他者と協働しながら新たな価値を創造していくことができる力の育成」についてでございます。

こちらでは、まず小柱「多様で厚みのある人材層の形成」について記載をし、その実現に必要な事項について、二つ目以降の小柱で記載をしております。

8ページをお開きください。小柱「個別最適な学びの推進」におきましては、一斉指導を前提としたカリキュラムだけでは全ての児童生徒の「主体的な学び」を実現することは難しいことから、個々の興味・関心や能力に応じた多様な学びの選択肢を提供するなど、個別最適な学びを一層推進していくことが必要であること、こうした取組を通じて、児童生徒の個性や特性に応じて、得意分野を更に伸ばしていくことなどについて記載をしております。

また、小柱「県立学校の体制整備」におきましては、「広島県の15歳の生徒に身につけてもらいたい力」を踏まえた学校の特色づくりについても記載をしております。

続いて、9ページを御覧ください。「4 今後の社会経済環境の変化に対応できる高度な資質・能力を有する人材の育成」についてでございます。

こちらでは、叡啓大学の設置による新たな教育モデルの実現や、県民や企業等のニーズに対応したりカレント教育を享受できる環境の整備などについて記載をしております。

続いて、「5 教育上特別な配慮を必要とする児童生徒等への支援」についてでございます。

小柱「学びのセーフティネットの充実」におきましては、全ての子供たちが健やかに夢を育み、その能力と可能性を最大限高める教育の実現に向けて、学びのセーフティネットの構築に取り組んできたこと、10ページに移りますけれども、こうした中で外国人児童生徒の増加など、社会情勢の変化を踏まえた対応も必要であり、こうした新たなニーズにも対応しつつ、多様な教育機会を提供することで学びのセーフティネットの充実を図っていくことなどについて記載をしております。

また、小柱「障害のある幼児児童生徒への支援」では、引き続いて一人一人の障害の状態や特性等に応じた専門的な指導の充実を図っていくことなどについて記載をしてご

ざいます。

続きまして、「6 教職員の力を最大限に発揮できる環境の整備」についてでございます。

こちらでは、教職員の働き方改革の一層の推進を図っていくことに加えまして、小柱の二つ目でございますが、「日本一の教員集団の形成」において、教員に求められる役割が、主体的な学びを推進していく上におきまして、ティーチャーからファシリテーターの役割が中心になっていくことなどについて記載をしております。

次に、11ページの「7 安全・安心な教育環境の構築」についてでございます。

こちらでは、防災教育など、学校安全に関する教育の推進などにより、学校における児童生徒等の安全確保に努めていくこと、各学校における生徒指導体制や教育相談体制を整備・充実していくこと、児童生徒が充実した教育活動を行うために必要な学習環境を整備していくことなどについて記載をしております。

最後に、「8 生涯にわたって学び続けるための環境づくり」についてでございます。

こちらでは、人生100年時代においては、生涯にわたって自ら学習し、自己の能力を高め、働くことや、地域・社会の課題解決のための活動につなげていくことが必要であること、12ページに移りますけれども、こうした学びを実現していくため、社会教育施設などの学びの場を拠点として、地域の学びを支える人材を育成していくとともに、学習機会の充実を図っていくことなどについて記載をしております。

説明は以上でございます。

湯崎知事： それでは、ここからは、まず学識経験者の皆様方に、順に大綱素案について御意見を伺いたいと思います。

順番は五十音順で私から指名をさせていただきます。

まず、安宅先生からお願いしてよろしいでしょうか。

安宅教授： それでは、私の思うことをお話ししたいと思います。

これまでの経歴としては、詳細は割愛しますが、マッキンゼーでコンサルタントをやって、それからヤフーでCSO（チーフストラテジーオフィサー）をやっています。データサイエンティスト協会の創立メンバー、理事として、データサイエンティストの定義などの整理を行っており、国の数理データサイエンス教育のカリキュラム設計、この認定制度設計にも携わっております。また、CSTI（内閣府総合科学技術イノベーション会議）人工知能技術戦略会議、基本計画専門調査会をはじめ国のAI系の検討などにも様々に関わっています。また、「シン・ニホン」という本も最近出させていただいております。

教育に対する問題意識が近年非常に高まっているのですけれども、一つ目に大事だと思っているのは貯蓄がない世帯が3分の1まで来ていて、極端な格差が、今生まれつつあるということですね。これをどういうふうに考えるかが大問題です。私が大学生だった頃、世帯数ベースで3%しかいなかったのが、今では31%もいるので。

次に女性の解放。日本の男性というのは中国の男性の半分も家事労働をやっていないのですけれども、家電製品によって浮いた時間は、全部男性の労働時間に回っており、女性の家事労働の負担が重くなっている。その背景にあるのは、やっぱりちゃんと女性が正しく平等に扱われるようになっていないということ。ジェンダー平等に向けて、何とかしないといけないということが大きい問題だと思えます。

三つ目に、極めて長生きの時代であると。最頻死亡年齢は女性で92歳、男性で88歳。すなわち85歳ぐらいまで健康であることを考えると、20~20数歳までの教育で終わることではもう社会が回らないことは間違いないです。だから、リカレントという言葉がありますけど、コンスタントに本気でやる人間がアップデートできる社会になるというのが、やっぱりこれからの未来、極めて重要となってくると思います。また、日本というのは世界的に見てもGDP比率的に明らかに人材育成に投資をしてないので、これは何とかしないといけないというのが基礎的な見解です。

あとウィズコロナの話もちよっとしておきたいのですが、当面は、ウィズコロナ社会が続くと考えた場合、一定程度以上の開放性と疎の状態を保たなければいけません。最近の「日経サイエンス」の記事にもあるのですけれども、イセエビですら病気の仲間に近寄らずに距離を保つようにしている。これを人間もやらないといけないわけですね。このことを考えると、通信インフラ環境と極めて速い高速端末を持っているかどうかはライフラインになっており、重要になってくる。これができる地域あるいは国とそうでないところでは、5年後、10年後のGDPであるとか、経済成長率が間違いなく差が出る

しょう。この取組の有無による結果の差は甚大になるという見解です。

コロナの話は、言うまでもなく数年続くと仮定しますが、この問題というのは、結局人類と家畜が、様々なウイルスの自然宿主（natural host）である地球上の野生動物と接しやすい状況にあることに端を発しています。例えば、既に3,000万人以上が亡くなったエイズの原因ウイルス（H I V）は、野生のサル免疫不全ウイルス（S I V）由来であることが分かっています。

これらの背後にある問題は何かという、結局、人間にとっての善（人類善）と地球にとっての善（地球善）が重なり合わないと、もう我々が欲した未来、人類の未来はないということまで来ているということです。環境省の一報どおりであれば、2100年、80年後には風速90メートル級、温暖化抑制に成功しても風速70メートルの台風が来ることになっています。これを考えれば、あと50年ぐらいで70メートル級の台風が本州に上陸することはほぼ確実です。70メートルというのは、大多数の家が倒れ、満タンのトラックが倒れるレベルで、90メートルの台風というのは、ことごとく家が倒れるということで、このような時代に即した人類を育てないといけないことは間違いないです。これは頭においておきたい一つの視点です。

一方、価値の生まれ方の視点で見ると、非常に大きく世の中が変わってきています。ニュースを御覧になった方もおられると思うのですが、7月にテスラがトヨタを抜き取り、世界最大の企業価値を持つ自動車メーカーになりました。今まで日本を含めてほとんどの国はオールドエコノミーで経済を回してきたわけですが、過去20年ぐらいでニューエコノミーが現れてきて、変革を担い巨大な経済を生み出しました。今は、サイバーとリアルの両方の特性を持つ領域にテスラのような第三種人類というべきプレイヤーが様々に現れ、オールドエコノミーをディスラプト（disrupt）しています。この第三種人類を生み出せる人間がこれからは必要で、先ほどみたいな視点も併せて持つ必要があります。

テスラがなぜあれほど企業価値を持っているかの一つの大きな視点は、彼らこそがサステナブルエナジー（エネルギー的に維持可能な社会）の未来をつくらうとしているからなんですね。だから、単純に電気自動車造っているから、といった問題ではないんです。

そういったものやっけていくためには、データやA Iの力が要ることは間違いありません。データとかA Iの技術革新は過去30年ひたすら進んできたわけですが、これらが、これから、あらゆる空間、あらゆる産業、あらゆる機能に実装が進んでいきます。当然、世界を見れば、教育現場も劇的に変わっていき、産業現場も変わります。

この様々なデータ×A I化したものが全てつながり合っていく社会が間もなく来るとするのが私の基礎見解で、この見立てに基づき、過去四、五年間行われていた経産省の新産業構造ビジョンであるとか、あるいは経団連のSociety5.0の検討が行われました。両方とも委員でした。

ということを見ると、A I vs. 人間というのは、ほとんど意味が無く、自分の経験からだけでしか物を言わない人と、データやコンピューティングパワー、A Iの力を解き放てる人との戦いになることは明らかです。ちなみに中国では中等教育段階、つまり中高段階から進学校においては、もう深層学習やG A N（敵対的生成ネットワーク）に至るまでの教育を2年前から開始しています。一方で、大学教育段階ですら、ちゃんとやっていない日本は相当遅れています。

データの力を解き放つのは、データだけの問題ではありません。統計数理とか数理素養に基づくデータサイエンス力、コンピューティングパワーを解き放つエンジニアリング技術（データエンジニアリング力）と、実課題を掛け合わせる力（ビジネス力）が必要で、この三つの掛け算が重要であるというのが、我々データサイエンティスト協会の基礎見解です。

これは協会でも四、五年前に、もっと前かな、まとめたものなのですが、この三つはどれが欠けてももうまく回らず、全部を掛け合わせる必要がある。一人一人がこの三つのスキルを使いこなすだけの力を身に付けることまでは必要ないが、どの領域でも最低限のスキルは身に付けていくことが必要であると考えられます。

ちなみにアメリカの主要大学では、コンピューターサイエンス（計算機科学）はやるのが当たり前になっている。日本はそもそもエンジニアの数も足りていないんですけれども、このデータ、A I時代に即した人材が全然生み出せておらず、生み出すことが重

大な課題であると思います。実はGAFA、特にグーグルとかから日本で世界水準の人を採ることは諦めたと僕がはっきり言われたのは2010年頃です。

また、今後、世界語に中国語が入ることはほぼ確実です。間もなく、あと2年くらいで、中国が世界一の経済国になります。今でも実質経済規模ではもう抜き去ったところまで来ている。今までは課題解決能力というのが、人を使う側と使われる側を分ける重大な基礎能力であったと思うのですが、そこにデータやAIの力を解き放てるための基礎的な力が必要であると考えられます。リベラルアーツは日本では美術や音楽といった感じで受け入れられがちなのですが、アメリカでもそういう議論多少あるのですが、これ、もともとは2,000年前に自由民と奴隷を分けるという言葉だったというのは皆さん御存知のとおりかと思います。だから、ここで言われる三学的な物をちゃんとしっかり考える力であるとか、伝える力の上でそもそもサイエンスやMath（数学）というようなことを教える。

そして、データ×AI的な力を解き放つ力を持ちつつ、結局、人間らしく物事をしっかりと判断して、それを人に伝える力というのは実際に求められる。サンドイッチ的な人材育成が重要だと思います。下（データ×AIの解き放ち）だけでは駄目で、上（感じる力、人間力）も必要であるということです。そういったものの上でこういった未来をつくりたいということで描いた形にするということが重要だと。

こういうことを考えると、今までの競争型人材というよりも、こういう未来をつくりたいということを描ける人である、そういったことをいろんな人とつないでやろうとする人というのが重要です。それを僕は異人と呼んでいます。しっかりとしたこういう世界を創りたい、こういう未来を描きたいと描ける心を持ち、それを技術的に解き、世界的にパッケージングする、これが未来を生み出す公式です。内閣府の知財戦略ビジョンに入った未来の方程式なのですが、錚々たる委員の面々が同意してくれてきたもので、多分そんなに間違っていないと思います。

このできた社会を回す人というのは確かに大事なんですけども、ほんの一部でも未来を創る人間がやっぱり必要です。そういう若者がしっかり出てくることを担保する意味で、若い人たちに対する教育というのは、シニア層も大事なんですけども、やっぱり一番大事だと思うのです。

知性について、ざっくり機能的に言うと、脳神経系は入力、処理、出力という三つのニューロンでできています。これを俯瞰して分かるのは、InputとOutputをつなぐ力こそが知性だということです。この大部分は「知覚」というべきものであって、外部からの情報を統合して意味を理解する能力です。ちなみに、「認知」と言っている人も多くいらっしゃいましたが、これは「知覚」の広がりから「感覚」を剥ぎ取ったものです。知覚は様々な経験、知的経験、人的経験、思索から生まれます。経験から生まれるのですけれども、先程のサンドイッチ的な人材育成の話は、これらを元に自分なりに感じる力を持つ必要があるということになります。

例えば、スーパーの風景を見て、大野耐一さんはトヨタ生産方式を生み出したといわれています。それは深い知覚がないと生み出せない。物理の公式、数学的な関係性などの美しさすら、普通の人には分かりません。それも経験と思索からやってきます。非常に濃い知的経験であり、人的経験を積む必要があり、それがないとその人なりに深く感じたり、生み出すことはできないと思います。そういうことを通じて、様々な知性的な能力が生まれてきます。具体的には、経験を昇華する力であったり、コンテキストに基づいて正しく判断するとか、言語的な思索を行うとか、新しい、先ほどみたいな知的な理解を行うとか、課題を設定して解決するであるとか、あるいは定性的なものを整理していく力であるとか、点と点をつなぐとか、異質なものを組み合わせるとか、つなぎ合わせていくとかっていうことをやるとか、俯瞰して意味合いを出すとか、あるいは知恵を生み出すとか、こういうことをやっていくということなどです。

そこで大事なことは、ファーストハンドの経験がやっぱり圧倒的に重要だということです。あと言葉、数値になっていない世界というのが大半であるということを受け入れることは極めて重大です。この二つのマインドセットの上で、全体を見てホリスティック（holistic）に受け止める、どういう要素があって、それらがどういう関係性があるかということを考える、そういったものを自分なりに表現する、いろんな軸で物を見つめる、あるいは意味合いを考える、こういったことを通じて知覚を深めていく必要があるんじゃないかと。

もう一回まとめますと、特に女性と貧困層とそれとシニア層の教育の視点というのは

しっかり持っておく方が良いということ、このウィズコロナの状態というのはあと1～2年は続きますので、この状態下において十分な高速な通信環境、端末を用意しとくことはウルトラクリティカルである。そうすると、基礎教養としてデータとAI的な力を解き放つ力も重大なのですが、人間らしく感じて判断して伝える力っていうのが恐ろしく重大で、それは生の経験をしっかりとやるということと、単純に吸収するというよりも自分なりに感じて、自分なりに気付く力というのはすさまじく重大になると考えられるので、その辺をうまく考えていただけると素敵な未来を目指す人が生まれてくるのではないかと思います。

以上です。

湯崎知事： どうもありがとうございました。

それでは、続いてになりますけども、今井先生、お願いしてよろしいでしょうか。

今井教授： ありがとうございます。では、私も少しお話をさせていただきたいと思います。

私は広島県とは、もう多分5年ぐらいのお付き合いをさせていただきまして、実は現大綱のときにも少し意見を言わせていただいたというような経緯があります。その当時に作られた今の大綱のバージョンもとても革新的で、5年前の当時として本当に「主体的な学び」というのを日本のどこよりも一番先んじて実現するというのをすごく明らかに打ち出していたというところで、素晴らしいなというふうに思っておりました。

それからもう一つ、現大綱で非常に革新的だと思ったのは、乳幼児教育から初等、中等、高等、大学教育までを貫いて、日本一の教育県広島理念をうたっていたということです。多くの場合、乳幼児期教育はいわゆる義務教育と切り離されて考えがちなのですが、広島県の場合には義務教育、高等教育の基盤として乳幼児教育がすごく大事なんだという認識をはっきりうちだしたことは、素晴らしいと思います。

今回の改定では、そのような重要な理念を踏襲しつつ、学校におけるインターネット環境の整備や、個別に合わせた、子供一人一人に合わせた教育、あるいは教員の働き方改革など、正に社会が求めているにもかかわらず、今、全然着手されていない社会にとって喫緊の課題に対して、日本のどの県にも先んじて本当に積極的にやるんだというようなことを打ち出したというのは、本当に素晴らしいと思います。

これが実現できれば、これまでなかなか慣習に縛られてできなかった日本の教育現場に風穴を空けて、日本の教育、広島はもとより日本全体の教育を大きく変革する起爆剤になるのではないかと非常に大きな期待を抱いています。

それから、現大綱での求められる人材像についてもコメントさせていただきます。

先程、安宅先生がお話しくださいましたが、AIを使いながらも、単に技術的な知識があるというだけではなく、いわゆるリテラシーという人文的なものも含めた人類がこれまで作り上げてきた全ての知識、それを組み合わせる新しい知識をつくっていくことができる、そういう人材がこれから求められます。そこで大事なものは、知識を柔軟にいつもアップデートしていける能力です。AIは人間が枠組みを決めれば大量のデータを処理できます。しかし、自分で仮説をつくったり、知識を自在にアップデートしていくことはAIにはできません。その能力こそ、AIに使われるのではなく、AIを使い、共生していくことができる、これから求められる人材となります。

大綱では自己の能力と可能性を最大限に高め、多様な個性、能力を更に伸ばし、将来の様々なステージに必要な能力を着実に身に付け、発揮することができる人材というふうに書かれています。正にここに書かれている人材を育てることが教育の目標になるべき、ならなくてははいけないことだと思います。

ここに書かれている各論、素晴らしいと思います。ただ、もう少し踏み込んで、各論をどうしたら実現できるのかということまで大綱に盛り込んでいただきたいと思いません。各論にバラバラに取り組んで、各論で終わっては、それぞれの各論さえ実現できないと思います。各担当部局の縦割りではなくて、各論が課題につながって協働されていく必要があると思います。

そのために何がされないといけないのかということ、非常にシンプルに一言で言ってしまうと、学ぶ力をつけること。それに尽きると思います。安宅先生がお話されたこれからの人材、その通りだと思うのですが、こういう人材をどのように教育できるのか、ここをきちんと考えなければ絵に描いた餅になります。安宅先生が挙げられたスーパーヒューマン的能力、現場の先生方はこれらを学校で全部教えろと言われてたら圧倒されてしまい、もう「無理」と思われてしまうと思います。でも、そうではないのです。家庭教育と学校教育で子供たちが「学ぶ力」を身に付けることができれば、それらの能力は

必要に応じて子供が自分で学んでいくことができます。だから、学校教育は、その能力を子供が身に着けるための支援をする場であるべきだと思いますし、行政は、学校と家庭に対して、その重要性を伝え、手立てを提案していただきたいと思うのです。

今、コロナウイルス禍で、学力格差のことがすごく心配されています。保護者の方は、やはりネット環境のことばかりおっしゃるんですね。ネット環境がないから、うちの子供は遅れてしまうというような心配もされている。なかなか学校がネット配信、ネットの授業、オンライン授業に対応してくれないというようなことを言われています。もちろんネット環境をよくする、整備することも大事だし、オンラインで授業できることも大事なのですが、では、家庭のネット環境だけで学力格差が生まれるのかといたら、全然そうではないということをお願いしたいと思います。

では、学力格差はどういうふうに生まれるのでしょうか。これは今のコロナウイルスの状況であるとかないとかにかかわらず、学ぶ力の個人差によって生まれてくると私は思います。これは成人にも言えることですが、自ら学ぶ力を持っている児童生徒は、様々な素材を利用しながらどんどん学ぶことができます。様々な素材とは、ネットにある動画や記事、ツールもそうですし、もちろん教科書や図書館、家庭にある書籍や新聞、雑誌など、入手可能な全ての素材です。学ぶ力がある子供は自分で素材を、しかも良い素材を探すこともできます。でも、残念ながら、自ら学ぶ力が弱い子供も成人もいるわけですね。学ぶ力が弱い子供は、幾ら動画教材を豊富に提供しても、なかなかそこから学ぶことができないという現実があります。

今回の大綱で、いわゆる特別支援の教育にも力を入れるということが明記されています。それは、素晴らしいと思います。ぜひ強調させていただきたいのですが、学ぶ力は障害の有無に左右されず、誰もが持っていて育てていけるものです。色々なお話を聞いていると、障害を持ったお子さんはどうやってそれを追いつかせようとするとか、その障害の程度を和らげて、何とか社会で暮らせるようにするとか、そのような視点が非常に一般的で、なかなか同じ土俵で障害者が健常者と競争するということがあまりありません。でも、パラリンピックに出られるような方は、普通のこういう人よりもっともっとすごいことができます。自分の障害をネガティブに、あれが足りない、これができないと考えるのではなくて、持っているものをどのように生かせるかということを経験してトレーニングされた方たちだと思います。でも、それはパラリンピックの選手に限らず、また、障害をもつ、もたないにかかわらず、全ての子供に言えると思います。

実は私の今学期の授業で、非常に重度の聴覚障害がある学生が履修していましたが、その人は私の目では、クラスで一番優秀でした。聴覚障害があるけれど克服して他の学生に追いついているというレベルではなく、自分の障害をある種武器にして、その武器をもって言葉というものを突き詰めて考え、言葉の学習の仕方を考え、素晴らしい視点を持っていると思いました。私は、障害があっても学ぶ力があれば、障害のない子供以上の学力をつけることも可能だし、飛躍することも可能だと信じております。ここをぜひ、特別支援の教育に盛り込んでいただきたいと思います。もちろん、障害を克服できるようサポートすることも大事ですが、この障害をネガティブではなくてポジティブに生かす方法というのを、是非、これから考えていかないといけないと思っています。

私は、認知科学という学問を専門にしておりますが、この学問は「学びとは何か」ということを実証的に検討することを使命としています。「主体的な学び」とは何かということは今でこそ認知科学の研究者ではない人々が普通に使われていますけれども、認知科学ではずっと以前から、何十年も前から、人が主体的に学ぶときと、外から「知識を入れようとする学び」では、何が違うのかという問題に取り組んできていたのです。「主体的な学び」について、I C A Pモデルって非常に有名なモデルがあるんですね。これは「よい学び」の階層を示したモデルです。Iが一番上層でPが一番下層です。Pはパッシブ、Aはアクティブで、CがコンストラクティブでIはインタラクティブです。この階層の詳細についてはお話しし出すと1時間は必要なのですが、ここで大事なのは、人の話をただ聞いているだけではほとんど何も残らないということです。学んだことが学び手の知識になり、保持されるためには、少なくともコンストラクティブとインタラクティブ、この二つのレベルを目指さなくてはいけないわけです。普通、能動的というと、それは良いことだと思いがちです。しかし、I C A Pモデルでは、アクティブというのは一生懸命に考えて、自分なりに、例えば下線を引いたり、付箋を引いたり、何かそういうふうなことをすることを指します。そして、それでは足りないのです。深く学ぶためには、与えられた知識を工夫して暗記するのでは足りない。「おぼえる」を超えて

知識を自分でつくらないといけない、そういうモードにならないといけないということです。

ここで、ぜひ申し上げたいのが、教師が幾ら分かりやすく授業動画をつくって、快適な通信環境で配信しても、児童生徒がPモード、受動モードで視聴すると、本当に何も残らないということです。先生たちがどんなに分かりやすく授業動画をつくっても、子供たちに何も残らなければ単なる時間の無駄になりますね。言い換えれば、分かりやすく教えれば、教えた内容が学習者の頭に移植されて保持されるという考えは全くの幻想だということです。これは、教え方の問題もあるけれども、児童生徒が、勉強は教えてもらうものというようなマインドを持っている限りは、どんなに教える側が周到に準備をしても、やっぱりコンストラクティブ、あるいはインタラクティブモードの「主体的な学び」というのは実現されないということにもなります。

つまり、これからの社会でAIに仕事を取られてしまうのではなく、AIと共生して自分の居場所を見つけ、社会で活躍できる人材を育成するためには、学習指導要領に定められた知識をいかに理解させ、記憶させるか、スキルをいかに教えるかということでは全く不十分なのです。幼児、児童、生徒、成人全ての発達段階で、学習者が自ら学ぶ力というのを身に付けていき、学びは自らするものだというようなマインドをつくっていかなくてはなりません。そのために、教育する側ができるのは、学習者が自ら学ぶ力とマインドを育てていくための環境をつくって支援をし続けるという、そこなのかなと思います。学校教育では、オンライン、オフラインに関わらず、Cモード、Iモードの授業を展開していくように工夫をしないといけないということです。オンライン授業のための、学校、家庭でのインターネット環境の整備などは、もちろん大事です。今、全然足りてない。だから、これをするというのはもちろん大事ですが、それをすれば十分という問題ではないことはぜひ言わせてください。

認知的に考えると、オンライン授業と教室での授業ではそこに起こる認知プロセスが大きく違います。だから、オンラインの授業を教室の授業と同じつもりでやったら絶対うまくできないと思います。それを教師が理解して、オンラインでもオフラインでもCモード、Iモードを展開できるよう工夫していかないとはいけないと思います。それを言うのは簡単ですが、具体的にそれを担わされる先生たちにとっては、現状ではとても難しいことだと思います。自ら学ぶことができる「学ぶ力」を持った人材を育てていくためには、教師の資質を高めることは、何よりも重要な課題だと思います。

教師の資質向上の課題の一つとして、やはり、現状を見て足りないと思うのは、ネットインフラに対応する知識とスキルです。この問題には、学校特有の原因があると思います。情報セキュリティの問題やプライバシーの問題が常にあって、学校の先生たちがパソコンに触って自由に色々なネットから情報を取る、発信するということが簡単にできない状況なのですね。でも、これを続けていると、結局、先生たちは、ネットのリテラシーや、セキュリティに対するリテラシー、使いこなすリテラシーが身に付かないわけです。なので、やっぱりそこはセキュリティを確保しながらも、もっともっと先生たちが学校でずっと使うというようなことをやっていかないとはいけないと思います。ある意味で、情報漏れというようなものを、今、恐れ過ぎて学校ががんじがらめになってしまっている感じがします。情報セキュリティに気をつけながらも、どんどん使っていないと、先生たちのリテラシーも育たないし、先生たちがネットリテラシーがないのに、子供たちにそれを教えることはできません。セキュリティ一点張りではなく、いかに学校でネットを使い、先生たちのネットリテラシーを育てていくかを広島県として、ぜひ考えていただきたいと思います。

大綱で児童生徒の一人一人の個性に合わせた学びというのを打ち出していることは、本当に素晴らしいと思いますが、単なる学習進度の把握とか、その子供が何をやりたいか、どういったことが好きかということで留まらないでいただきたいとも思います。特に、思うように学力が伸びていない子供たちについては、学習のつまずきの原因をきちんと明らかにするというのも大事です。これに関しては、今、実は私は義務教育指導課と一緒に、つまずきのもとを明らかにするアセスメントというのをつくらせていただいています。それは本当に大事なプロジェクトだと思っています。

大事なことばかりで恐縮ですが、「主体的な学び」を実施するための専門知識をぜひ先生たちに持っていただきたいです。特に心理学、認知科学、こういう観点から、人はどういうふうに情報を自分の中に入れるのかとか、記憶するのかとか、それを解釈して結論を導くのかとか、学びに欠かせない認知の働きに関して、先生方に、是非もう少し専

専門知識を持つような、それこそリカレント教育というものをしていただきたいと思いません。教師はファシリテーターであるというようなことをここで、大綱でしっかりと書いていることはすごいことだと思います。これを実現していくためには相応の専門知識が必要だと思います。ファシリテーターとしての役割が大事だと理解し、実践するためには、教師の役割が知識を入れることではなくて、子供に学ぶ力をつけるということを強く意識することです。今の時代、求められる知識やスキルはどんどん変わっているのです。自分で自分に最適な学び方をいつでもできる、どの時期でもできるというような環境が整わないと安宅先生がおっしゃるような、良い人材にはなれないのかなと思います。そこを始めるのは大学教育からでは、はっきり言って遅過ぎると思います。実は、小学校からでも遅いと私は思っています。ですので、入学前から、もう手当てをすることがすごく大事だと思うですね。でも、就学前に手当てをすることは学校で学習することを先じてする、幼稚園で教えるとか、保育園で教えるとか、そういうものではなく、家庭の中で、あるいは園・所で一緒に日常生活の中で、言葉の力と考える力の両方を身に付けることが最も大事だと思います。

これを、どうしたらできるかといったら、その生活全体の中で支援をする。特に子供は大人との日常的なやり取りや遊びの中から一番学ぶことができるので、それを保護者にも地道に啓蒙して、その手当を保育園とか幼稚園に啓蒙にして、その支援につなげていっていただきたいなというふうに思います。

何で幼児教育が一番大事なのか、幼児から始めることがそんなに大事なのかというと、小学校2年生で既にもものすごく大きな差ができていくという現実があるのです。実は最近やった調査なのですが、りんちゃんの誕生日が3月14日、誕生日のちょうど1週間後がお別れ会、カレンダーの中からお別れ会の日の一つ選びましょう。これ、上位の子は全然何ともない、もう90、ほぼ100%、でも、下位の子は正答率10%程度です。カレンダーに丸をつけるという、ただそれだけのこと、時間概念の理解に2年生でこれだけの差ができていくという現実があります。言葉の使い方も同じです。この絵に対して、「チーズを縦に割いています」と書いてほしいところを、下位層の子供は破いていますとか、切っていますとか、一番極端な子供はとろけさせていますというふうに書いた子もいました。チーズっていうと、もう溶けるしか思いつかないということなのかもしれません。この調査からわかったことは、学校でしっかりと学ぶためには、その基盤として、就学前にしっかりとした日常で使うことばを基盤にもっていないといけないということです。ことばを軸にして、幼児期から、もちろん初等教育、中等教育、もうシームレスにつなげて学ぶ力をつけるという、そこに全てを持っていかないとはいけません。

その時に、学びは学校だけではなくて、社会全体で行うという認識を共有することがすごく大事で、そのつなぐ役割として行政に期待したいと思っております。私も広島県の行政マンの方とは随分お付き合いをさせていただいていますが、本当に素晴らしいと思う。だから、まず広島県でこれを実現させていただきたいという思いです。

今、教員採用試験の倍率もどんどん低くなっているということで、力のある教師が足りないということが懸念されています。でも、私は、それはそんなに心配することではないと思っています。すごく良い人材を集めるためにできることって、とてもシンプルだと思います。まず、すごく能力が高い人が先生になりたいと思うというのは、自分が魅力的な教育を受けてきたということが一番大きいと思います。自分の教える学生たちを見ていて、すごく優秀で企業に行ったら、すごく年収も高い人気の企業に行けるだろうなという人の中で、先生になりたいという人がいました。そういう人たちみんな口を揃えて言うのは、自分の受けた教育がとっても魅力的だったから、自分も是非次世代にそれをしたいと言うんですね。だから、それさえあればできると思います。そして、教師自身がプロフェッショナルとして子供と一緒に学ぶことができる。私、こういうことができる社会だと、子供や大学生は、自然と教師になりたいと思うと思います。フィンランドはまさにそういう社会です。フィンランドでは、実は医学部より教育学部に入學する競争率が高いそうです。一番成績の良い、優秀な高校生たちが先生になりたいと教育学部を希望します。実際、フィンランドは先生が研究職として位置づけられています。決して教師の給与が特別高いわけではない。お医者さんより高いということはない。でも、先生は「教える」ということを研究する研究職という位置づけがあって、本当に自由に工夫することができる。そういう環境をつくることは、すごく大事なことでないかと思っています。

すみません、随分長くなってしまってます。これで終わらせていただきたいと思います。本当に広島県には期待していて、日本一の教育県として日本を元気づけていきたいと思っていますので、よろしく願いいたします。

湯崎知事： 今井先生、どうもありがとうございました。

それでは、中邑先生、お願いしてよろしいでしょうか。

中邑教授： 中邑です。よろしく願いいたします。

資料なしでお話しさせていただこうと思うのですが、私、異才発掘プロジェクトというのを実はやっています、その関係で平川教育長にお声がけいただきまして、広島県の個別最適な学び担当の皆さんと、広島版ROCKETというのを始めております。これは何かというと、学校へ行っている子供は学校へ行っている子で素晴らしいんですけど、行っていない子供たちも素晴らしい能力があると。逆に行っていないからこそ時間がたくさんあって、できることってたくさんあるのではないかなというところから始めた事業なんです。その中で感じるということのは、やっぱり面白いんですよ。

実は、広島企業の皆さんと一緒に、福屋さんであるとか、にしき堂さん、サタケさんなど、こういう企業さんと一緒にリアリティーを追求するというプログラムをやっているんです。例えば子供たちを連れて、「百貨店は百科事典」というプログラムをやるわけですね。前日に県立図書館に行って、ステンレスとアルミニウムの違いを調べて、あるいは銀の違いを調べてと言うと、いろいろ調べるわけです。子供たち、すぐ元素記号を持ってきたりするわけです。福屋さんに行くと、銀食器とステンレスの食器があるのですが、銀のカトラリーとステンレスのカトラリーの違いが分かるかというところから始まるんですよ。実際に百貨店に行くといっぱい本物を売っています。だから、お店の人と話しながら、なるほどなということも学んで帰ってくるって、こういうプログラムをやっているんですよ。学びに意欲を失った子供たちというのは何でこんなことを勉強しなきゃいけないのか分からないという子供たちがたくさんいる。そういう子供たちにアクティビティーなど、いろんなところから学びを推進していくと、家に帰って調べ始める子供が出てきたりするんです。こういう子供たちの学び方をもっと自由にしていくということが、これからの時代としても必要なだろうなと。時間の枠、空間の枠を広げていくというのが、実は面白い流れなのだろうなと思ってます。

実際に広島県では、我々のROCKETプログラムが平日に開催されることがありますけど、ここに県内各地の子供さんがやってくることを出席扱いにしてくださっているという、これは非常に大きなことだと思うのです。学びはもうこの辺の、いわゆる広島の中では学校という枠を超えちゃっているということが可能になっているわけです。

実は、私、この間やった調査では、中学生の10人に1人が不登校状態である。学校に行っていない子供だけではなくて、行っている子もほとんど聞いてないとか、寝ているとか、他のことをやっているという。もう面白くない、他のことをやりたいという子供たちを受け入れる場所として、今、こういう活動をやらせていただいています。

今回、この大綱の素案を読ませていただいて、本当によくまとまっているなと思ったのですが、少し感じることをこの資料に従ってお話をしていこうと思います。

まず、5番目、「教育を取り巻く社会情勢の変化等」という2ページのところなのですが、この社会情勢の変化の中に、やはり先ほど安宅先生もおっしゃっていましたが、貧困の問題ですね。相対的貧困率の高さというのが、子供の7人に1人が不登校状態にあるという、こういう状況というのはやっぱり看過できない状況だろうなと思うのです。そのことが実は学びに大きな差を与えてきているという、私自身が思うのは勉強のための条件というのは、学校ではなくて、朝おなかが空いてないということですね。家に帰って勉強ができる場所があるとかツールがある、これ、非常に重要な問題であるという、学校だけではなくて、学びを推進する上において、そういう視点からも捉えていく必要があるし、何らかの文言はここに必要だろうなと思いました。

それともう一つは、この3ページに人生100年時代の到来ということで、医療技術の進歩ということがそこに書かれているわけですが、一方で、医療的ケアの必要な子供たちが10年間で倍増しているということですね。広島県のデータを押さえてきてはいないのですが、恐らく数百名はおられるだろうと思うのですが、いわゆる呼吸器をつけ経管栄養で、本当にコミュニケーションを取ろうとしている。でも、よく分からない。この子供たちも特別支援教育に入っていくけど、先生たちも本当にどうしていいか分からないという子供たちが増えている。増えているといっても非常に小さい人数なのですが、問題として非常に大きい。こういう、子供たちを取りこぼさないためにも、少しそ

ういう言葉を入れていただければありがたいなと思っております。

それと、今度また、次のページにまいりまして、4ページですけど、「求められる人材像」というところなのですが、ここでは本当に素晴らしいことが書いてあるのですが、例えば様々な知識や情報を組み合わせて新たな価値を創造する力や多様な他者と協働・協調できる力、さらには云々と書いてあるのですが、これは大事なことではあるのですが、これから先を考えたときに、私、最近、ヒューマンセントードな世界からネーチャーセントードな世界、こういう視点を持った子供たちを育てていく必要があるのではないかと強く思っているのです。地球温暖化の問題にしても何にしても、やっぱりここに書いてあることというのは、個の能力を伸ばしていくという。そうではないですよ。その社会というか、社会を考える力というか、社会を伸ばしていく力、何かそういうところに視点が行くような、何かちょっと書き方をさせていただければいいものになるだろうなと思いました。

あと6ページですね、各論のところですね。この各論のところなのですが、実はこの大綱を読んで、モバイル端末を活用するといったような、誰もが身近に持つようになった、このICTの活用ということって、あまり触れられていないんですよ。私自身は、もうこれからの能力というのは、そういう外部の機器と併せて人間の能力を発揮するという。我々、ハイブリディアンって呼んでいるのですが、いわゆるこのテクノロジーを取り込んだ能力を持って生きていくしか、例えばこの1から8にしましても、個別最適な学び、本当に処理障害のある子供たちって幾ら練習しても処理速度上がらない、そういう子供はワープロを使えばいいし、計算が本当に努力しても駄目な子は電卓を使えばいいといったような、ICTでその機能を代替するというのは、それほど今、おかしなことではなくなっているというように思うのです。こういう議論というのは、やっぱりあっていいだろうと思いますし、安全の確保というときに、これもやっぱりツールは非常に重要であります。教員研修にしてもそうです。先生方がこのモバイルツールを使って、通勤途中に研修を受けるということだって、実はこれから、それほど難しくないわけです。何かそういったような視点というか、今までの何かやり方がありきということから、もうちょっと何か脱却したら、素晴らしいものにできるのではないかなと思うところです。

もう一つですね、やっぱりフレキシブルな設定って非常に重要だろうと思うのです。例えば教員研修にしても、教員研修というのはこういう形で行われると、毎年、それが何かプログラムが生まれて、夏期研修だの何だのと続いていくわけですが、それって、もういいんじゃないかということなんです。やっぱりフレキシブルに変わっていくためには、それを、研修を組んでいく必要がある。また、そのためにやっぱり組織があってこそ、実は教員研修が生きていくのだろうと思うのです。もう全てにおいてそうだと、安全の確保にしても、子供の最適な学びを検討するにしても、とにかく、例えば個別最適な学びというのは、子供を幾ら教育しても、幾ら給料を与えてもどうしようもない難しいこと、たくさん要るわけです。その場合、カリキュラムを変更するとか、卒業単位を変えていくとか、もっとフレキシブルに動かしていく力というのが、これからは求められていくのではないだろうかなと思っております。

気になった文言として、7ページの「3 一人一人の多様な個性・能力をさらに生かし、他者と協働しながら新たな価値を創造していくことができる力の育成」と書いてあるのですが、もう協働という言葉がこの中にたくさん使われているのですが、これって、もう何か私は、失礼かもしれないですが、昭和の何か匂いを感じてしまう言葉ですよ。みんな仲よく元気よくというスローガンを掲げた学校ばかりで、暗く独りで静かに暮らす子っていうのは悪い子なのか。それは個の特性なんですよ。それを認めることというのが、実はダイバーシティではないのかなと思っております。

ですから、ここは他者と協働しながらではなくて、他者を理解しながら、といった言葉に変えていくとか、多様性の理解というところを、もう少し踏み込んで、検討されるというのものになるのではないかなと思いました。

少し意見は申し上げましたが、全体としては非常にバランスの取れた、いい大綱案になっていると思っております。

私からは以上です。

湯崎知事：ありがとうございます。これまで、3人の学識経験者の先生方から、それぞれ、また、正に多様な御意見を頂戴したのかなというふうに思っております。大変ありがとうございました。

それでは、残りの時間で、本日御出席の皆様全員で大綱素案について議論できればと思っています。今の3人の先生方の御意見をお伺いして、御質問なんかもあったのではないかと思いますけれども、そういったこと、あるいはもちろんこの大綱そのものに対する御意見、どんなことでも結構ですので、自由討議ということで御意見を賜りたいと思いますが、いかがでしょうか。

それでは、細川委員、お願いします。

細川委員： 3人の先生方、大変ありがとうございました。貴重な御意見をありがとうございました。

私も前回、5年前の大綱が非常によくまとめられておって、それから5年たって、これからの5年で社会情勢などが変化する中でどのように大綱も変化していくべきであろうかということをおっしゃったのですが、一つは、今井先生もおっしゃっていただきましたけれども、例えばこの間、藤井聡太君が2冠を取った、そういう非常にある部分で優れた力を持つ子供がいるという事実もありますし、先ほどおっしゃったように、障害を持ちながら一生懸命勉強している子供もいる中で、それを支える教職員の方々が本当に生き生きと働ける状況を、今後とも広島県が持っているだろうかということをおっしゃっているところでありまして、そうでないと、また、この5年後の大綱の見直しの際に、同じ文句が並ぶのではないかなというようなことも思っています。掛け声だけにならぬように、特に10ページの「6 教職員の力を最大限に発揮できる環境の整備」のところですが、「教職員一人一人の力を最大限に発揮できる環境の整備・働き方改革の推進」というのは、やはり全国教育委員会会議に行きましても、必ずどこの県も悩まれているところでもありまして、ぜひ広島県から、日本のトップリーダーとして、これ、解決したぞというものにしていただけたらなというふうに思います。

私は運送業界に身を置く者ですが、私が小さい頃は乗務員さんというのは畳の上で寝ないものだという、常に仕事をしていてですね、家に帰るのは週末だけというようなものだというふうに思っていたのですが、最近は働き方改革とかいろいろルールもできまして、ほとんど毎日家に帰ります。なおかつ余暇で自分の趣味を楽しんだりして、本当に知事のお言葉じゃないですけど、暮らしをエンジョイしているんですよ、働くことに一生懸命になって。その辺は、職員室はいつまでも電気がついてるものだという昔の、私たちが小さい頃の感覚ですよ。そういうものから、是非脱却していただけたらなというところを思っておるところです。

例えば学校にしてもクラブ活動にしても、優れた指導者がいる学校はやはり一流じゃなくて超一流の子供が育っていると思うんですよ。そのため、是非とも教職員の方々に生き生きとした働く環境を整えていただきたいというところを申し上げておきます。

以上です。

湯崎知事： ありがとうございます。全てが、先ほどの絵に描いた餅にならないように、文章をつくるのは役所というのは大体得意なものですから、そうならないようにすべきだと思います。さらには、この働き方というか、この環境のところをもう少ししっかりと書き込んでという御趣旨でということによろしいでしょうか。

細川委員： はい。

湯崎知事： ありがとうございます。

中村委員、お願いします。

中村委員： 私も素案が出ておりますので、この内容に沿って、ちょっと感じたところを幾つか、先生方のお話をお聞きして重ねているところもそうでない部分もあるのですが、幾つか御指摘をさせていただきたいと思います。

2ページの「教育を取り巻く社会情勢の変化等」についてですが、こちら先ほど御指摘ありましたように、私もここ数年の変化に限ったことではないかもしれませんが、子供の貧困、前回の総合教育会議でも申し上げたことではあるのですが、子供の貧困ということが社会情勢の変化という中には入ってくるのではないかなと思います。

それから4ページ、「求められる人材像」について書いてあります。特に一つ目の丸の最後の5行あたり、これは本当に企業経営者にも正に求められる資質・能力なのだろうと思います。これを読みまして、私も改めて、自分の身が引き締まるような思いがしたところでもあります。正に、これからの社会で求められる人材像ということだと思うのですが、それを受けてといいたいでしょうか、次の5ページの取組の方向のところの最初の行に、本県では、前述の本県の育成すべき人材像云々というのがありますけれども、ここに書いてある本県の育成すべき人材像というのは、この4ページの求められる人材像とい

うことなのか、それとも3ページの最後のところにある1行の、下線の引いてある人材といったようなことなのか、ちょっと読んでいて少し何を指しているのかなというのが分かりにくいような気がしました。つまり4ページの求められる人材像のところに書いてある内容が、ある意味、高い目標、日本最高レベルのデジタルリテラシー等々、非常に目標として何ていいたいでしょうか、素晴らしい目標だというふうに思うのですけれども、そこを、正に本県の育成すべき人材像ということでやっていくのであればもう少しはっきり読めるように書いたほうがいいのかと感じたところであります。

それから6ページ、幼児教育のところなのですけれども、現大綱に「県内全ての乳幼児が養育環境に関わらず、質の高い教育・保育を受けることができるように」という表現があります。これはもう既に県で取り組んできて、実績も上がっている内容ではありませんけれども、県内全ての乳幼児が養育環境に関わらずという表現は、私は大事なポイントだと思うので残していただければいいなというふうに感じているところです。

次に、人生100年時代というのが、この素案の中に3回出てきます。これは、実際そうなると思うのと思うのですけれども、自動的に全員が人生100年時代になるわけではなくて、やはり健康管理等、一人一人努力をして100年になる。もっと言いますと、健康寿命を延ばさないと寝たきりの人ばかり増えても、これは社会にとっても決していいことでもないと思います。企業でも健康経営等々いろいろ取り組んでいるところでもありますし、正に労働人口が減ってくる中で、女性とともに高齢者を活用していかないといけないと思うのですけれども、ここの点が、人生100年時代、そういう意味からして当然のようになってくるのかなと思います。こうしたことから、啓発というのでしょうか、教育というとおこがましいかもしれませんが、人生100年豊かに暮らしていくための何か、そういった施策がもし、教育委員会ということではないのかもしれませんが、そういう取組もやった上で人生100年時代がうまく本人も社会も回っていくようになってくるのかなというふうに思っているところです。

それから、新型コロナウイルス対策のところ、3ページ、それから7ページにも書いてあるのですけれども、デジタル機器の活用等ということなのですけれども、これは決してコロナウイルスだけではなくて、本県でも大きな災害がたくさん起きていますし、今年も何回も気象上の警報が発令されて、ただでさえ登校日が少ない中で学校が休校を余儀なくされるということが何日もありました。そういった災害対応も踏まえた上でも大事なことだろうと思いますので、そういう記載も必要ではないかと思います。

それから、最後なのですけれども、今井先生も細川委員も言われたところに少し絡むんですけれども、10ページの「日本一の教育集団の形成」というところです。ここにも書いてありますように、これからの教育を担っていく教員に求められる役割というのは、大きく変わってくるということだと思います。ファシリテートする力、教育活動全体をデザインする力等々ということですし、これまでも「主体的な学び」に本県では教員に取り組んでもらってきております。

ただ、その一方で教員の採用倍率というのは低下を続けてきておりますし、時間外の労働時間を見ましても、いわゆるブラック企業と言われても仕方がない状況にもなっております。子供、親、家庭への対応も難しさを増してきておるということで、教員が直面している今の職場環境というのは、一昔前とは全く異なってきているのではないかと思います。

私が以前からちょっと思っていることがあります。企業でも新卒で採用した社員をいきなり営業担当として、即戦力とはいいいながらも、いきなりそういう使い方をすることはあまりないのではないかと思います。教員の世界では大学での教育等々を通じて、かなり即戦力だとは思っているのですけれども、こういう環境の変化もありますので、望ましいのは、1年間はいきなり担任を持たずということではなくて、やはりサブ的な立場でOJTをやっていくということができれば、非常にいいなというふうにずっと思っております。そういう中で、昨今のこういう環境の変化あるいは現実にメンタルを病んでしまう新卒採用の教員等々という話を聞きますと、そういう思いを強くしているところでもあります。なかなかこれは財政的な裏付けもないとできないことですし、すぐに対応できることでもないと思いますけれども、今の状況を踏まえれば、考慮していく余地が大きいのではないかなと思っておりますので、あえて述べさせていただきます。

以上です。

湯崎知事： ありがとうございます。今の御意見の中で、求められる人材像のところです。これ、事務局の方で何かクリアできる、しておくことがあれば。

経営企画監： 5ページの上段において、御指摘のあったように、現時点では、本県の育成すべき人材像という記載になっているところがございますが、この表記につきましては、前述にあります、「本県教育の基本理念・目指す姿」という表現にするなど、あまり色々な言葉が飛び交わないように、整理させていただけたらと思います。

湯崎知事： よろしいですか。

中村委員： はい。

湯崎知事： ありがとうございます。  
続いて、いかがでしょうか。  
近藤委員、お願いします。

近藤委員： 三人の先生方には貴重な御意見ありがとうございました。先生方のお話聞いて質問と、あと素案を拝見しての思うところを何点か述べさせていただければと思います。

まず、質問なのですけれども、先生方三人とも学び方、これから大事なのは学ぶ力だということ、知識とか情報なんかをいかにして活用していくか、そういった力をつけることが子供にとっては、子供というか学ぶ側にとっては大切で、今度、教える側については、それを育てるためにファシリテートする力というんでしょうか、それが大事だということをどの先生もおっしゃっていらっしゃるところなのかなと思いました。

昨年、広島版東大ROCKETのプログラムを拝見させていただきまして、本当に子供たち自身が知りたいと思って調べる姿、分かった、何か発見したというのを見つけたときの表情というんですかね、生き生きとした、そういった姿を見て、ああ、学ぶというのはこういうことなんだなというのを感じると同時に、意欲というのを持続させつつ、また新しい学びに向かおうとするファシリテートする力、ファシリテーターの方がいろんなところでアドバイスとかされているのですけれども、その力によるところがすごく大きいなと感じました。

中邑先生に少し教えていただきたいのですけれども、東大ROCKETの中で、ファシリテーターの育成等をどのようにされているのか、もし広島県の方で参考にできるものがあれば教えていただきたいなと思います。

まだ続けたほうがよろしいですか。

中邑教授： じゃあ、お答えしてよろしいでしょうか。

近藤委員： はい、お願いします。

中邑教授： 今、広島県には個別最適な学び担当というセクションがございまして、そちらの方々と一緒に県内の指導主事の先生たちに集まらせていただきまして、一緒にカリキュラムをつくるということもやっております。ですから、我々だけではなくて、先生方にそのつくり方、ノウハウというものを学んでいただきながら、今度は先生方が実施していただくという、そういうスキームをつくり上げてやっております。

近藤委員： ありがとうございます。

引き続きなのですけれども、今回の素案の中で、中村委員も触れられていましたが、求められる人材像のところ、進歩し続けるデジタル技術に適用し活用できる日本最高レベルのデジタルリテラシーというのがあるのですけれども、具体的にどういったレベルといいますか、どういうのを想定して、広島県は向かっていけばいいのか、これ、安宅先生にお聞きするのがよいのか、教えていただければと思います。

安宅教授： 安宅です。ちょっとデジタルの話以外も含めて、三つぐらいあって、更にお伝えしたいのは、僕は本業がストラテジストというか戦略をつくる人間なのですけれども、その視点からすると、ちょっと、「HOW」は素晴らしいのですが、つくりたい人の像がもう少しクリアになった方がいいのではないかなと思いました。

僕は基本的には素晴らしい人っていうのは、運が良くて、根気があって、勘が良くて、人間としてチャーミングな人で、その上にスキルがある人だと思うのですけれども、そういう視点ですね。あと生命力というか生きるエネルギーみたいなのがないと、今からここから50年、60年、100年たつととんでもない時代になるので、未来を創れる人を生み出せないんですね。それを生み出すんだって強い意思をもう少し打ち出してみてもいいのではないかと思います。

また、基本的な倫理が今、社会から欠落しつつあるので、自分たちが来たときよりも美しくするんだというような考え方などをしっかりと教えていかないと、未来は良くなる。更に言うと、生み出したい、未来を創る人を育てるんだという意識を、やっぱり広島県として打ち出されたほうがいいのではないかと。今の若い人たちの多くは絶望の中で生きていますよね。未来は変えられるという視点を持つということは極めて

重要で、現状の課題はたくさんあるけど変えられるんだと、変える経験を持たせてあげないといけない。だから、本だとか知識に対する愛みたいなのをしっかりと持たせた人間を育てないと未来は変えられないというのが思うところです。

あと二つ目に、私が見ていて感じたこととして、これもストラテジスト的な視点ですけども、あまり教育の世界でこういうことを言われなくてもいいのかもしれませんが、これ、多様と書いてあるのにもかかわらず、その育て方の話は全く多様性がないように見えるのです。社会を回す人だけじゃなくて創る人もつくるんだということをしかりと打ち出した方がいいと思います。回す人にももちろんリーダー層、専門家層やリテラシー層、これが一番ボリュームとしては多いわけですけども、リーダー層の議論しかされていない。しかも、回す人側しか書かれていないのですけれども、創る人側の議論をもっと打ち出した方がいいのではないかと思うのです。そういう異人を生み出すみたいなことを埋め込まないと、広島からは優れた回す人は生まれても異人が生まれにくい状況になりかねないので、もったいないと思っています。

そういう上で、双方のトラックでスキルとして何がマストなのかというのをしっかりと押さえていて、この判断なんだということであれば話は分かるのですけれども、何となくそこがつながっていないので、その視点を入れられたらどうかなというのが二つ目です。

三つ目は、一つは今のデジタルの話ですけども、光でつながっているということと高速端末というのは、もう絶対にないともはや教育は成り立たないという見解です。これは県なり自治体から配ると、これはもう貸与でいいんで、それはないともはや成り立たない。今みたいなパンデミック状況というのはここから数年は続くので。

あと、いわゆる勉強というよりも気付く力の方がここからの未来、本当に大事になるので、デザイン力なのか何なのか分からないのですけれども、そういう力というのをどうやって育成するのかという視点をもう少し強化してもいいような気がします。そういう才能があり、芽がある子供たちが遊べるようなファブ (Fab) のような、デザインコーナーみたいなものを、ある程度の数で造ったらいいと思いますし、恐らく推定するに、僕らみたいな人間が子供だった頃、つまり四、五十年前と比べたらやっぱり子供が減っている分、教室が空いているのではないかと思われまますので、そういったところをファブ (Fab) にしてもいいのではないかと思います。

それとともに、未来を創る人側のことを考えたら、そういうアウトライヤー的な人たちの逃げ場、遊び場みたいなをつくれるか、つけれないかが、異人的な人間が育つか育たないかの鍵になると思います。その隙間をつくってあげることは結構重大なことだと思います。

生の体験の強化はこの中でされていくと思うのですけれども、僕は、実はこの間、尾道としまなみ海道、そして今治、そして倉敷、直島等回ってきました。尾道の求心力のすさまじさはびっくりしたのですけれども、驚くべきいい人材が集まっていて、路地の中で中目黒のいけている中古本屋みたいなのをいきなり開店して、これ、今日開店したんですよ、みたいな店とかがありました。土地が人を呼んで、人が土地をつくっているんですよ。ああいうことを見ると、ああいう土地の記憶を持った状態で知恵が生まれた空間をどれだけ持てるかが広島の未来をつくると思う。広島県は膨大な異人を生み出しているはずであって、土地の記憶とかそういったものをうまく生かした空間をつくることは、実は教育に直結していて、そこで人が集まっていると思うんですね。そういうことも是非やっていただくというのが大事なんじゃないかなと思います。

デジタルリテラシーが一番ポイントとして伝えたいことは、プログラミングなんてやっている暇があったら数理素養をしっかりとっておいた方がいいということです。数理素養こそ大事で、数学や、サイエンスの嫌いな子供が育ったら、もう未来は絶対ないんです。プログラミングは覚えられますから、それらを嫌いになったら終わりなので。日本の中2、中3とかの数学だけ見たら確かに世界トップレベルなんです。ただ一方で嫌いな子供も多いんです。これを広島においてはみんな好きなんだということをするだけで、未来は明るくなる、劇的に。レベルは高いので、それだけの問題なんです。数学やサイエンスへの愛を育てられるかが結構問われていて、その「HOW」が大事だと思って、もしそういうことをやりたい人は先ほど言ったファブ (Fab) みたいなところで配っている端末とかでがんがんやらせるというような、それでMOOCや反転学習みたいなことをやっていけば、僕は小学校、中学校でも天才が生まれてくると思います。そっちはそうなるのではないかなと思います。でも、そっちよりも、今お伝えした前半分の方が多分大事で、経営計画でいうと最後の像をどうしたいのかをはっきりした方がいい

など思いました。以上です。

湯崎知事： ありがとうございます。

近藤委員，まだ続きが。

近藤委員： ほかに2点よろしいですか。

湯崎知事： はい。

近藤委員： 大綱の表現について，2点の意見を述べさせていただければと思います。

この大綱なのですけれども，多くの県民の方に読んでもらって共感してもらって，一緒に取り組んでいってもらうことが必要なんだろうと思います。そうすると，この大綱自体が読んですつと理解できる内容になっていることが重要なのではないかなと思ひまして，大綱中にデジタルリテラシーだとかファシリテーション，リカレント教育，カリキュラムマネジメントなど，片仮名語だとか専門用語があつて，なじみのない県民の方も多いのではないかと少し思ひました。これ，一読して分かるものにする必要があるのではないかなというのが1点です。

もう1点が，11ページ目の各論の「7 安全・安心な教育環境の構築」の部分なのですけれども，学校における安全・安心の確保ということで，最初の丸なんですけど，第1段落目で，問題行動に対応する生徒指導体制の充実がまず記載されていて，2段落目が生徒指導上の諸課題に対して，各学校における生徒指導体制や教育相談体制の充実を図っていくと書かれていて，第1段落目が，まず安全という視点でまとめたものと思われることと，あとは生徒指導といっても，生徒に寄り添うことを意識しての生徒指導であることを前提とした記載だとは思ひのですけれども，安全のための生徒指導というところがあるので，この点，何か書き方に工夫ができないかなと思ひましたところなんです。

例えば安全は防災教育にとどめて，生徒指導上の諸課題は安全に含めず，安心という視点からまとめられるだとか，相談体制の充実，それから生徒指導という順番に記載するだとか，5ページに記載されている生徒指導の説明で，児童生徒の特性や背景を踏まえた生徒指導という表現がされているのですけれども，こういった表現を用いるとか，何か少し工夫があつたらいいなと思ひました。

以上です。

湯崎知事： ありがとうございます。

時間も押してきたところなのですが，菅田委員と志々田委員，もし何かありましたら。

菅田委員： 先生方どうもありがとうございます。

時間も無いようですので，ちょっとこの素案に関して，3ページ目の新型コロナウイルスのところなのですけれども，これ，やはり学校における学び方に加えて，教え方というふうなことも考えていかなきゃいけないと思ひます。特に中村委員がおっしゃったように，1年目から担任を持たせるということが今後できるのかどうか。今回，多分，教育実習なんかはかなり簡素なものになっているんじゃないかなといったところで，いきなり担任というのは難しいのではないのでしょうか。今後もこういったパンデミックとか災害があつたときにどうなのかなということがあります。

それから，求められる人材像のところ，先ほどからデジタルリテラシーとかいうふうなことがあるんですけど，これからはそういうデジタルデータというのはすぐ世界を飛び回ってしまいますので，やはり倫理観，道徳観の醸成というのは必要になってくるのかなと。日本は幸いなことに，日本のAIというのは手塚治虫先生が書かれている鉄腕アトムとか，それからまた，ドラえもんとか正義の味方が多いのですけれども，アメリカとかはロボカップとかターミネーターとか人間を殺す方のAIの人気があるようなので，やはり日本人の良さとして，そういった倫理観，道徳観を持ってデジタルの技術，AIはプログラミング一つによって変わりますから，目的と倫理観をちゃんと持たせてデジタル活用できる人材を育てていきたいなというようには感じています。

それからあと，スポーツのところと個別最適などところ，不登校とか，今，フリースクールとかがどんどん充実してきていると。それで，スポーツもプロチームと協力してということもあつたと思ひのですけれども，社会人チームも結構充実してきてますんで，そういった民間の力ですね，行政だけでなく民間の力を利用，活用することによって，広島教育を良くするということもあればと思ひています。

それからもう一つ，デジタルのところではリモートを，ここにも，8ページにも書かれてありますけども，小学校低学年の段階から海外の子供たちと，リモートで遊ぶだけで，かなり国際的な感覚も醸成させられると思ひますので，「国内外の生徒や大学」では

なくて「小学校段階から児童生徒」といった言葉にしても良いのではないのでしょうか。ちょっと難しい言葉のSTEAM教育も大学のところに記載されていますけれども、ドイツは高校卒業の40%、お隣の韓国でも30%が理工系なんですけれども、日本は20%という状況で、物づくり立国と言いたい日本が一番少ないというのは、ちょっと危機感がありますので、そういった理系に対するアレルギーのない教育というのも、高校のところから意識していただければと思っています。

以上です。

湯崎知事： ありがとうございます。ちなみに多分、STEAM的な考え方というのは、高校ではなくて、極端に言うと幼児からというところ、広島県としては目指しているところかなど。ただ、幼児に数学を教えますというのではなくて、そういったような基盤をつくって、小学校からということと、あとは先ほど安宅先生もおっしゃっていましたが、中学校なんかで嫌いにならないというところが、大事なのかなと思いますんで、もちろん早い時期からということで考えたいと思います。

志々田委員。

志々田委員： ごく簡単に。安宅先生も今井先生も中邑先生のお話も聞いていると、何か少なくとも、これから必要な人材育成として、学校という建物の中の教室という場所の中で、机の前に座って黒板と教科書とにらめっこをしながら何らかの学習をするっていうような、そういう教育のスタイルというのはほとんど語られてなかったのかなというふうに思います。今の日本の教育も、恐らく広島県の学校教育も、90%以上若しくはそれ以上かもしませんが、教室の中で机の前に座って教科書を読んでいる子供たちがいるということ、やっぱり変えていきたいなということをはっきりと示したほうがいいのかなということも思いました。

なので、教室の中での学習にこだわらない。地域に出ていたり、職業の場所に行ってみたりして、そこで有意義に学べるような教育を開発していくんだというような、そういう言葉が入ってもいいのかなということ、今日いろいろ勉強させていただいて思いました。

その中で、一つだけ、生涯学習を進める環境づくりということで、学校とか公民館とか図書館とかが教育施設として挙げられているんですが、博物館も大事な社会教育施設の一つで、博物館とかそういうクリエイティブであったり、創意する環境で子供たちが自由に学んでいただいたり、学芸員の専門性に触れたりするというような、そういう機会もすごく大事だと思うので、是非とも博物館というのを入れていただきたいと思います。というのも、広島県では博物館の運営というのは、首長部局も管轄をされていると思います。もちろん観光だとか、そういうところに活用していただくのも大事なのですが、やっぱり教育施設であるということをしつかりと教育大綱の中に位置づけていただければ、教育委員会と首長部局との連携もうまく進むものじゃないかなと思いますので、博物館は入れていただければなということ、ちょっと感じました。

以上です。

湯崎知事： ありがとうございます。志々田委員、これ、博物館というか美術館とかも含めたミュージアムだというふうに考えてよろしいですか。

志々田委員： はい、そうです。全て。動物園も水族館も博物館に入ります。

湯崎知事： ありがとうございます。

あと、教室についての御発言のところですが、正に今、学びの変革で、これ、叡智学園に行くとそうじゃない姿というのが如実に現れてきていると思うんですけど、今後の大きな課題として、それを県内にどうやって広げるかということですね。これ、実は大きな課題として認識をしていますので、ただ、この教育大綱の中にそこまで明確に記述としては薄いかもしれませんから、そこは考慮していくということです。

ありがとうございます。もう時間なのでですけども、私もちょっと一言申し上げると、以前、私が同志社大学に行ったときに、当時の学長から言われたことがあって、私は人材という言葉が嫌いなんです。人材というのは社会の観点から、どういう人を正に育てるのかという観点なのですが、教育というのはそういう側面はもちろんあるんですけど、個々の個人、個人がそれぞれ持って生まれている、ある意味でいうと権能というか、権利とか義務とか、そういうものを全てひっくるめて、個人がどういうふうに正に個人として花開いていくかということが教育だと、これは個人の観点なんですよね。前回の教育大綱をつくったときも、実は後で若干そういう批判を受けて、だから、社会的な観点が非常に強いということで、これ、今回また、ちょっと教育委員会の方にお配りし

たのですけれども、京大の山極総長にお伺いしたときも、やっぱりちょっとそういうことを言われたので、京都の方は皆、同じことを言われるなというふうに思ったりしたのですが、少し社会の観点だけじゃなくて、その個人の観点を教育の意義というところを、分かるように書いてもいいのかなと。そういう視点も少しあってもいいのかなというふうに私も改めて思いました。ごく最近の気付きなので、途中でこれまで言ってなくて申し訳ないのですけれども、そういうことであります。

ということで、すみません、私まで意見を言わせていただいて大変申し訳ありませんでした。

何か全体を通して、どうしてもこれを言っておきたいということがございましたらお願いをしたいと思いますが、いかがでしょうか。三人の有識者の先生方も含めて、今の各教育委員の意見なども含めてございましたらお願いできればと思いますが、何かございますでしょうか。

よろしいですか。

それでは、ちょうど時間でございます。本日は本当に皆様お忙しい中、大変貴重な御意見、御示唆を賜ったというふうに思っております。学識経験者の皆様方には、改めてこの場をお借りして御礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

そして、次回の会議では、この御意見等を踏まえて、事務局の方で更に練りまして、大綱案をお示ししたいと思っております。

委員の皆様方、そういうことでよろしゅうございますか。

( な し )

湯崎知事： ありがとうございます。

その他、何かこの手続的なこと、プロセス的なことでございましたら。

よろしいですかね。

( な し )

湯崎知事： ありがとうございます。

それでは、本日は以上でございますので、事務局の方に進行をお返しいたします。

経営企画監： ありがとうございます。

それでは、次回の総合教育会議に関し、御連絡をさせていただきます。第3回目となります次回の会議につきましては、10月下旬以降を予定しておりますが、詳細につきましては、改めて御連絡をさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

それでは、以上をもちまして、令和2年度第2回広島県総合教育会議を終了させていただきます。ありがとうございました。

(15:00)